

柳沢

宮沢賢治

青空文庫

林は夜の空氣の底のすさまじい藻^もの群落だ。みんなだまって急いでゐる。早く通り抜けようとしてゐる。

俄^{にはか}に空がはつきり開け星がいつぱい耀^{きこ}めき出した。たゞその空のところどころ中風にでもかかったらしく変に淀^{よど}んで暗いのは幾片か雲が浮んでゐるのにちがひない。

その静かな微光の下から烈^{はげ}しく犬が啼^なき出した。

けれども家の前を通るときは犬は裏手の方へ逃げて微^{かす}かにうなつてゐるのだ。

一 寸^{ちよつと}来ない間に社務所の向ひに立派な宿ができた。ランプが黄いろにとぼつてゐる。

社務所ではもう戸を閉めた。

（こんや、二時まで泊めて下さい。四人です。たいまつがありますか。わらぢがありますか。それから何かよるのたべものがありますか。ほう、火がよく燃えてるな。そいぢや、よござんすか。入りますよ。）

（さあ、二時までぐつすりやるんだぜ。ねむらないとあしたつかれるぞ。はてな、となり

へ誰か来てゐるな。さうだ、土間に測量の器械なんか置いてあつた。」

青いきらびやかなねむりのもやが早くもぼんやりかゝるのに誰かどしどし梯子をふんでやつて来る。隣りの室をどんと明ける。

「やあ旦那さん。ぶん葡萄酒一杯やりなさい。」

「葡萄酒？ 葡萄酒かい。お前がつくつた葡萄酒かい。熱めてあるのかい。」

「まあ一杯おあがりなさい。さうです。アルコールを入れたのです。」

「アルコールを入れたのか。あとで？ 作つてから？」

「さうです。大丈夫ですよ。本当のアルコールです。見坊獣医から分けて貰つたのであ

ります。」

「どうして拵へたんだい。野葡萄酒を絞つてそれから？」

「いゝえ、あとで絞るのです。まあ、おあがりなさい。大丈夫であります。」

「さうか。そんなら貰はうか。おつと、沢山だよ。ふん、随分入れたな、アルコールを。」

「ずるぶん瓶を沢山はじけらせました。」

「ふん。」

「砂糖を入れないでもやつぱり釀わきます。」

「さうかい。砂糖を入れたら罰金だらう。おい、吉田、吉田。吉田を呼んで来て呉くれ、あ、いゝよ、来た来た。おい吉田。葡萄酒ださうだ。飲まないか。」

「さうですか。おや。熱くしてあるのか。どれ、おい沢山だ。渋いな。」
ねむけのもやがまた光る。

「あしたは騎兵が実弾射撃に来るさうぢやないか。どこへ射うつのだらう。」

「笹ささ森山、地図を拝見、これです。なあに私等の方は危くありませんよ。」

「しかし弾丸たまが外それたら困るぜ。」

「なあに、旦那さん。そんなに来ません。そいつは騎兵だんすぢやい。」

ふん、あいつはあの首に鬱金うこんを巻きつけた旭あさひ川かはの兵隊上りだな、騎兵だから射的はまづい、それだから大丈夫外それ弾丸は来ない、といふのは変な理窟りくつだ。けれどもしんとしてゐる。みんな少し酔つて感心したんだな。

「今日は君は楽だつたらう。」

「えゝ、しかし昨日は鞍掛くらかけでまるで一面の篠笹しのやさ、とても這はふもよぢるもできませんでした。」

「いや、おれの方だつてさうだ。さあ寝るかな。あしたは天気は大丈夫だな。四つまでできるかな。」

「えゝ。」

「やつ、お邪魔しあんした。まだ入つて居をります。置いて行きます。」

「おい、持つて行け、持つて行け、もう飲まんぞ。」

さうだ。帝室林野局の人たちだ。

たしかにこれは夢のはじめの方の青ぐろい空だ。山の中腹から裾野すそのに低く雲が垂れ、その星明りの雲の原の上でごろごろと雷が鳴つてゐる。実に静にうなつてゐる。夢の中の雷がごろごろごろうなつてゐる。雲の下かしはの柏の木立に時々冷たい雨の灌ぐそそのが手に取るやうだ。それでもやはり夢らしい。

何時かな。もう二時半だ。少しおくれた。いや、丁度いゝ。寒い。

(おい。もう二時半だ。二時半だ。行かう行かう。) 寒くてガタガタする。みんなうらうら仕度をしてゐる。ゆふべのつゞきの灰色ズツクの靴^{かばん}、ラムプの光は青い孔雀^{くじゃく}の羽。
(いゝか。火がついたか。さあ出よう。たいまつはまん中だぞ。寒いな。)

空の鋼は奇麗に拭^{ぬぐ}はれ気圏^{ふち}の淵^{あをくろ}は青黝^{みぢん}ぐろと澄みわたり一つの微塵も置いてない。
いっばいの星がべつべつに瞬いてゐる。オリオンがもう高くのぼつてゐる。

(どうだ。たいまつは立派だらう。松の木に映るとすごいだらう。そして、そうら、裾野と山が開けたぞ。はてな、山のてっぺんが何だか白光するやうだ。何か非常にもの凄^{すご}い。雲かもしれない。おい、たいまつを一^{ちよつと}寸うしろへかくして見ろ。ホウ、雪だ、雪だ。雪だ。雪が降つたのだ。やつぱりさつき雨が来たのだ。夢で見たのだ。雪だよ。)

空気はいまはすきとほり小さな鋭いかけらでできてゐる。その小さな小さなかけらが互にひどくぶつつかり合ひ、この燐^{りんくわう}光をつくるのだ。

オリオンその他の星座^{はて}が送るほのあかり、中にすつくと雪をいたゞく山王^{せんわう}が立ち黒い大地をひきゐながら今^{はて}涯もない空間を静にめぐり過ぎるのだ。さあみんな、祈るのだぞ、まつすぐに立て。

(無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇)

我今見聞得受持 願解如来第一義

力いっぱい声かぎり、夜風はいのりを運び去りをはるかにオホツクの黒い波間を越えて行く。草はもうみんな枯れたらしい。たいまつおほぐまぼしの火の粉は赤く散り、大熊星は見えません。

(ここのものでよく間違ふぞ。左を行くと山みちなんだ。鳥居があるので悪くするとそっちへ行くぜ。) みちは俄にはかに細くなったり何本にもわかれたり。黒い火山礫くわざんれきと草のしづく。

(いつもなら火を見て馬がかけて来るんだが今はもうみんな居ないんだ。すっかり曇ったな。)

みちが消えたり又ひよいと出て来て何本にも岐わかれたり。

柏かしはの枯れ葉がざらざら鳴ってる。

なんだか路みちが少しかしい。もう大分来てゐるのだが。

(向ふにどてがあるかどうか一寸ちよつと見て来よう。おい。ついて来るな。そこに居ろ。何だ。

たいまつが消えたな。そこに居ろよ。はなれるな。ずるぶん丈の高い草だ。胸きりある。）

（どてが無いよ。この路に沿つてゐる筈はずなんだ。事によつたら間違つたぞ。もう少し行つて見よう。けれども駄目だめだ。やつぱり駄目だ。こんな変な坂路がなかった筈だ。少し北側へ廻つたのかな。すっかり曇つたし、困つたな。仕方ない夜明け迄までに一ぺん宿へ引つ返し日が出てから改めて出掛けよう。）

（けれども一寸路をさがして来よう。何とか抜けられるかも知れない。曇つてさへ居なかつたら見当だけつけてぐんぐん本当のみちの方へ草をこいで行けばいゝんだが。仕方ない。ますます変な所へ来てしまった。やつぱり駄目だ。さあ引つ返しだぞ、戻りだぞ。やあ、降つて来た降つて来た。マントのあるのは誰々だ。さあ馳かけるんだぜ。いゝか。そら。大きな岩だ。つまづくな。）

（ふん、あれがさつきの柳沢の杉だ。）

何だ沼森の坊主め。ケロリとして睡ねむつてやがる。）

所々雲が切れて星が新らしく瞬く。

（ははあ。こゝだ。こゝで間違つたんだ。仕方ない。まあ行つて火をたかう。）
山だけまだ雲をかぶつてゐる。

（おい。上等のお菓子だぜ。一つづつ分けるぞ。もうぢきだ。もう十五分。）しかし宿でも迷惑だな。

（路を間違へて歸つて来ました。火をたきますよ。みんなきものを乾かせ。辛いな。けむりが。）辛い。けむり。それにきものが乾かない。烟がみんなそちへばかり行く。ぱつと燃えろ。さあ、ぱつと燃えろ。

（ああ、もう明るくなつて来た。空が明るくなつて来た。きれいだなあ。おい。）

深い鋼青から柔らかな桔梗ききやう、それからうるはしい天の瑠璃るり、それからけむりに目を瞑つぶるとな、やはりはがねの空が眼めの前一面にこめてその中になるいろいろの字が沢山沢山光つてうごいてゐるよ。くの字が光つてうご……。

もうすっかり暁だ。

（お握りを焼かう。はあ、ゆふべはどうも。途中で迷つて。雨は降るし。）

（さあ日が出たやうだ。行かう行かう。さあ飛び出すんだよ。おゝ、立派、この立派。ふう。）

日の光は琥珀こはくの波。新らしく置かれたみねの雪。赤々燃える谷のいろ。黄葉をふるはす
白樺しらかばの木。苔モッス瑪瑙アゲート。

（おゝい。あんまり馳かけるな。とまれ。とまれえ。おゝい。止れたら。待てたら。）

うん。朝の怒りは新鮮だ。炭酸水だ。

鈴蘭すずらんの葉は熟して黄色に枯れその実は兎うさぎの赤めだま。そしてこれは今朝あけ方の菓子
の錫紙すずがみ。光つてゐる。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十四卷」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力：林 幸雄

校正：mayu

2003年1月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柳沢

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>